

クリティカル・リーディングを深める国語科学習指導

——文学作品の「比べ読み」を通して——

Critical Reading of Literary Texts :
Through Comparative Reading Lessons

大西 光恵
OHNISHI Mitsue

I はじめに

「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編」には、中学校 3 学年の「読むこと」の指導事項として「イ 文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えること」が明示されている¹⁾。かねてから森田 (2010)、有元 (2008) ら諸氏によるクリティカル・リーディングの読みが提唱されている²⁾が、それが学習指導要領にも反映されたことは、クリティカル・リーディングの重要性を示唆している。T・E・ラファエルの論じるクリティカル・リーディングについて、有元 (2012) はその基礎となるクリティカル・シンキングを次のように解説している³⁾（下線は論者が添えた。以下同じ）。

事実を正確に理解したうえで、どこがよいか、どこに問題があるかを客観的に分析して、だれもが納得のできるような根拠をあげて評価したり批判すること。（中略）納得がいけば相手の意見を取り入れ、納得がいかなければ冷静に根拠をあげて反論する。そして、相互に批判し合っ
てグループの中で誰もが納得のいくような合意を形成する。つまり、授業の中でクリティカルなシンキング、問題解決を目指す相互批判のディスカッションを伴う。

書かれている内容を理解した後に、問題の所在を客観的に分析して、根拠に基づいて考えを導き、グループの中で互いに問題解決をクリティカル・シンキングという過程を経ることがクリティカル・リーディングの際に重要であることがわかる。クリティカルという言葉は、単なる「批判的」と

いう意味ではなく、与えられた情報をうのみにするのではなく、「大切なものを選び取る」という選択が含まれているとピーター・H・ジョンストンは論じている⁴⁾。テキストの多くの情報から選択し、問題の所在を明らかにし、問題解決に向かうクリティカル・リーディングの指導は、国語科の読みの指導の今日的な課題と言えよう。クリティカル・リーディングの先行実践は、国語科のみならず、数学科や英語科など他教科にも見られ⁵⁾、クリティカル・シンキングの育成の重要性が注目されている。

前述した学習指導要領（平成 29 年度告示）の「読むこと」領域の言語活動例として、「イ 詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動」が挙げられている。文学的文章の場合、物語や小説を読み、作品の内容や登場人物の生き方、表現の仕方などについて適切に批評するためには、文章を主観的に味わうだけでなく、客観的、分析的に読み深める力の育成が求められる。作品の特質や価値について「根拠をあげて評価する」クリティカル・リーディングの力をどのようにしたら学習者に身に付けさせることができるのだろうか。

II クリティカル・リーディングの力を育成する「比べ読み」

中冽 (2020) は、文学作品の「比べ読み」が優劣の問題ではなくそれぞれの共通性、差異性、特質を浮き立たせることを言及している⁶⁾。作者の意図の推論、作品のプロットとしての事件の発端、展開、クライマックスを読み解くことにより、対話的な読みが深まり、それらが読みの力を深めて

いくことにつながっていくというのである。

複数のテキストを読み比べる「比べ読み」に関する先行研究には、中洩の他に大村(1984)、安藤(1989)、井上(2003)、船津(2010)が挙げられる。大村(1984)は、批判力を育てる読書指導の可能性を提唱し、本を比べて読むことの重要性を示唆している⁷⁾。安藤(1989)は、「比較の視点」として、大きく「対比」、「類同」の二つを挙げて、「比較の視点」を採り上げることにより、「思考力」を養うことができると論じている⁸⁾。大村や安藤は、「比べ読み」が、批判力を育て、思考力を養うことができることを示唆している。クリティカル・リーディングには、「比べ読み」が有効であると考えられる。

中洩(2006)は、文学作品の読みの位置として諸項目を挙げており、「人物・事件／虚構の方法／意図・精神」は、「批評力」の育成をめざすと述べている⁹⁾。作品の特質を明らかにすることが、重要であることを示唆している。比べる観点が「意図・精神」であれば、作品を媒介としてその作品に窺われる意図や精神について、仮想の作者と対話することを導くというのである。これは、クリティカル・リーディングによる対話的な読みの一つと言える。酒井(2017)は、クリティカル・シンキング教育における文学教材を使った学習には、二つのプロセスがあると述べている¹⁰⁾。作品の叙述から立ち上がる問いに対する問題を設定し問答を行い、問題解決を図るという「文学を読む」プロセスと、学習者たちが多様な見方を拡散させ、対話的交流によって吟味評価し、最終的には自己を構築するという「文学で学ぶ」プロセスである。読みの問題を吟味し、再度自己の新たな発見を構築する過程が重要であるというのである。これは、中洩の論じる文学作品の読みの位置と一致する¹¹⁾。学習者自身が問題を発見し、対話的交流により、自分の考えを吟味し、構築していくことは、クリティカル・リーディングを深めていくであろう。中洩(2006)、酒井(2017)が述べる文学作品の読みをふまえて、以下の「比べ読み」の要件を導き出した。

- ① 作品の特質を明らかにする
- ② 読みの問題を設定し、問題解決を図る

- ③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

「比べ読み」による学習活動を通して、テキストとテキストの対話、人とテキストの対話、人と人との対話が導かれていく。文学作品の「比べ読み」は、クリティカル・リーディングに大きな効果があるのではないかと考える。

本論では、クリティカル・リーディングの対話的な読みをふまえた文学作品における「比べ読み」の学習指導のあり方について考察を行う。なお、本論で扱う「比べ読み」とは、「二つ以上の作品を比較、対照して、多面的、総合的な読み」¹²⁾を導く読みとして定義し、作品の範疇には生徒作品も含めている。

Ⅲ 「比べ読み」に求められる三つの要件

Ⅱ章で述べた中洩、酒井の論をふまえて、クリティカル・リーディングを深めるための「比べ読み」の学習指導の要件として、次の三つを構想した。

- ① 作品の特質を明らかにする

複数の作品のプロットとしての事件の発端、展開、クライマックスを読み解くことにより、作品の構造的特色をとらえる。主な登場人物はどのような人物か、登場人物の行動や文学作品の表現についての分析的な読みから、クリティカル・リーディングへの移行が容易になる。

- ② 読みの問題を設定し、問題解決を図る

重要なできごとは何か、どのような問題があり、どのように解決されるのか、中心になる考えは何か、その根拠は何なのか、読みの問題を設定して、予想される解決策を考える。文学作品の主要な論点を複数のテキストと比較していく中で問題の解決策を生み出していく。こうした類推の思考スキルを生かした問題の解決策を図ることは、創造的思考の探究につながっていく¹³⁾と想定される。

- ③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

グループを単位とした創発的なコミュニケーションは、小さな発見や視点転換が多く生まれることで枠組みの再構成(reframing)を促しやす

いと石井（2017）は述べている¹⁴。様々な意見が縦横につながり、新たな視点や着想や発見が生まれ出ることにより、クリティカル・リーディングによる対話的な読みを導く深い学びが可能になっていくと考える。他者との交流活動を通して、新たに発見したことを再確認する場面である。また、メタ認知を行い、自己内対話を深めることにより、新たな考察を深めていく。

Ⅳ 「比べ読み」を位置づけた授業の実際

前述の三つの要件をふまえて、言葉がもつ価値への認識を深め、クリティカル・リーディングによる対話的な読みを導く年間を通した「比べ読み」の授業を構想した。論者の行った2020年度の勤務校である中学校3年生3クラスの授業について考察していく。文学作品における「比べ読み」の授業の概要を次に示している。（資料1）

1 授業の概要

年間を通した文学作品の「比べ読み」の展開にあたり、導入→発展→深化→総合という段階をふまえたステップを設定した。本論では、**発展**としての④「形」（菊池寛）と古典作品との「比べ読み」、**総合**として実施した⑤「形」（菊池寛）と他の4作品との「比べ読み」の実践を採り上げて考察していく。

教科書は「新編新しい国語3東京書籍」を使用している。既存の使用教科書教材だけでは、複数の「比べ読み」の教材には不十分であると考え、他の作品群を教師側が教材として用意した。本授業で使用教科書以外の使用教科書以外も含めて「」を用いている。

2 「形」におけるクリティカル・リーディング

(1) 古典作品との「比べ読み」

「形」（菊池寛）の作品を学習後、古典作品との「比べ読み」を行い、作者が伝えたかったことは何か、その理由と根拠を明らかにすることにより、クリティカル・リーディングによる対話を深めることをねらいとした。

① 作品の特質を明らかにする

初発の感想を共有することにより、作品の特質を明らかにしていく。学習者の初発の感想を次に示している。（資料2）

資料1 年間を通した文学作品の「比べ読み」の授業

(一学期)	
導入	①詩「生命は」（吉野弘）教科書教材と学習者の書いた鑑賞文の「比べ読み」
発展	②俳句「囀りをこぼさじと抱く大樹かな」（星野立子）教科書教材と詩「はじめて小鳥がとんだとき」（原田直友）の「比べ読み」
深化	③「二つのアザミ」（堀江敏幸）教科書教材と「言葉の力」（大岡信）の「比べ読み」
(二学期)	
発展	④「形」（菊池寛）と古典作品との「比べ読み」 「筆者が「形」で伝えたかったことは何か」についてグループで学習後、発表会を行い自己の学びを書く。
総合	⑤「形」（菊池寛）と他の4作品との「比べ読み」（芥川龍之介「鼻」、白、別役実「空中ブランコ乗りのキキ」、安岡章太郎「サーカスの馬」）グループで学習後、発表会を行い、好きな作品を選び「比べ読み」の考察を書く。
(三学期)	
発展	⑥「アラスカとの出会い」（星野道夫）と同じ作者の作品「十六歳の時」、「旅をする木」の「比べ読み」
総合	⑦「百科事典少女」（小川洋子）教科書教材と他の作品の「比べ読み」 「風の唄」（あさのあつこ）教科書教材、「最後の一句」（森鴎外）教科書教材、「蒼い道」（小澤征良）「小さな手袋」（内海隆一郎）等から好きな作品を選定した「比べ読み」

資料2 学習者の初発の感想

ア「槍中村」と聞いただけで恐れられていた人物があっけない最期を迎えるという対比が印象強かった。人の思い込みは、行動を変えて、人生をも大きく変えてしまう、という部分が面白い。なぜ、黒皮緘を着た武者(中村)に、復讐しようとしたのか。思い込みには、猩々緋と唐冠のかぶとが深く関わっていると思った。きっと以前の戦いで何かあったのだろう。どのような力があったのか。

イ「水際立った華やかさ」、「輝くばかりの鮮やかさ」、「嵐のように」というように情景の表現が珍しく、しかし、わかりやすく、想像しやすいので聞いていて難しい内容でも楽しい。最後らへんの主人公の焦りがリアルに伝わってくる。

ウ「形」を読み、見た目という物が人々に与える影響力の強さを知った。自分で築いたからこそ気づけない「その形」の大きさは自分の実力をおお隠すほどに膨らんでいた様子が逆にその人の努力の大きさを示していると思う。自分の成功、失敗は自分の実力だけでなく、相手の様子に左右されることがわかったので、それさえも超えられるような努力をしたい。

エ全てが難しかったけれども、最後の横腹を切りさいた場面は衝撃的だった。気を抜いた時に切りさかれた新兵衛と若い侍の会話をしっかりと考えると面白そうだった。

オ今まで積み上げてきた形はすばらしくてもその形に合う内面をもたなければならぬと感じました。形だけに頼っているとその形がないときに前に進めないということをかぶとや猩々緋のない新兵衛の様子に表されていると思いました。私にあるレッテルだけを成長させるのではなく、自分自身の内面を成長させられるようにしたいと思いました。

初発の感想では、最後の場面が、どういうことを表現しているのかよくわからないと記していた生徒もいたが、感想を共有することにより、新兵衛が亡くなったということ象徴している結末を確認していった。

アの学習者は、「槍中村」と聞いただけで、敵が脅威を感じるという場面において、作者が記していないこれまでの戦績にまで思いを馳せている。イの学習者は、この作品の情景描写が優れており、比喩表現が巧みに描かれていることにより、

小説の情景が想像しやすく、主人公の心情が臨場感を持って読み取れる面白さについて言及している。エのように、最期の場合が衝撃的であったという感想は多く見られた。ウ、オの学習者は、この作品の主題ともいえる形の持つ力について初発の感想の時点で既に気付いていることがわかる。

「形」は、難字句が多いために、作品に対して少し難しいと感じた学習者も見られたため、学校図書館を活用して難字句の意味調べを行った。導入においては、作品の難字句に対する抵抗意識を低くしてから、作品の読みに移行した。

② 読みの問題を設定し、問題解決を図る

皆と考えたい問いを抽出し、予想される答えを想定させた。②の俳句と詩の「比べ読み」(資料2)では、教師が読みの問題を設定したが、「形」の授業では、皆と考えたい問題を自ら設定させ、班ごとに協働して問題解決を図った。皆の考えた問いは以下のとおりである。

- ・中村新兵衛はなぜ、美男の若い侍にやすやすと鎧とかぶとを貸してしまったのか。
- ・「新兵衛は高らかに笑った」のはなぜなのか。
- ・「戦わずして浮足立った敵陣が、中村新兵衛の前にはびくともしなかった」のはなぜか。
- ・なぜ、雑兵は中村新兵衛をおそったのか。猩々緋と唐冠のかぶとと新兵衛の関係とは。
- ・かぶとが違うだけでなぜ新兵衛は負けたのか。

グループで交流する際には、話し合いたい課題を選ばせて、意見を交流させた。原典「常山紀談」との「比べ読み」を行った後、以下の課題について個人で考えた後、グループで協働してホワイトボードにまとめ、発表会を行った。(写真1)

- 1 筆者が「形」で伝えたかったことは何か。その根拠と理由について考えなさい。
- 2 この作品のどういうところに工夫や魅力を感じますか。登場人物の人柄や、考え方、場面の展開、表現の仕方、情景描写などに着目しながら書きなさい。

写真1 各班のグループ発表の様子



あるものの特徴を捉えて、そのよさや価値について評価して論じることを「批評」というが小説などの文学作品を批評するときには、次のような点に留意するとよいことを学習者に確認した。

○登場人物の人柄や考え方、場面の展開、表現の仕方などの特徴を捉え、それらの意味や効果を考える。

○作品のどういうところに工夫や魅力を感じるか、作品について自分はどう評価するかなどを述べるとよい。

各班の考えた「形」の伝えたかったことは以下の通りである。

- ・立場とか過去の栄光で自分の実力を判断したり、うぬぼれたりするのではなく自分自身が努力し続けるべきだ。
- ・自分の実力だけではなく、「形」にも誇りを持って大切にしていけるべきである。
- ・見かけや装備などにとらわれず、本当の自分の実力を知るべき。自分を客観視することが大切だ。
- ・周りからの評価を気にせず、自己を磨くことが大切である。
- ・固定概念にとらわれない。
- ・時には中身よりも「形」が大事になる時もある。

作品の工夫や魅力について、5班は「昔の話なのに現代でも通じるところがおもしろい」、「比喩表現を使い、読者に情景描写しやすいようにしている」と書いている。

作者が「形」で伝えたかったことに対してなぜ、そのように考えたのかという根拠と理由を結びつけて、説得するための材料、本文の叙述と関連付けて考察できるように導いた。古典作品との「比

べ読み」による物語としての魅力を分析している班も見られた。（資料3-1）

資料3-1 学習者の作品分析

ア 古文にはない若い侍の活躍を取り入れることにより、新兵衛の形の大きさの関係がより詳しくなり、わかりやすくなった。

イ 古文では、「戦没す」との新兵衛の死を明記しているが、『形』は、直接「死んだ」と表現せず、少し遠回しに「・・・貫いていた」と表現することにより、読み手に余韻を与え、心に残る。また、過去形でくくることにより、当人も気づいていないという新兵衛の葛藤を読みとれる。

ウ 「朝日に輝かしながら」、「吹き分けられるように」など比喩表現が巧みに使われており情景が浮かびやすくて見事だと思った。

エ わざと遠回しに書いて、読者に考えさせている。古文の作品よりも、一つ一つの言葉が詳しく書かれているため、心情や場面が頭に浮かび残りやすい。

オ この作品のいいところは、人によって学ぶことが全然違うことだ。いろいろな感じ方ができるとてもおもしろいと思った。僕が読んで思うこと以外のことを他の人が読み取るから友達と話して互いが学んだことを言い合うのもよいと思った。昔の教訓が、今の世界でも通じることがあるから、これからは昔の作品を読んでみるのも面白いと思った。

（下線は論者が添えた。以下同じ。）

古典作品には、若い侍の活躍は描かれていない。また、古典作品には、「戦没す」とはっきりと中村の死が描写されているのに対して、小説ではイの学習者が分析したように、淡々と簡潔に主人公の結末を描くにとどめることにより、読者がその意味を補おうとする効果が生じ、かえって読み手に余韻を与え、心に残ることを言及している。また、古典作品では、教訓で締めくくられているが、小説ではあえて教訓を書かないことにより、読者に考えさせる終わり方をしていることに、エの学習者は気付いていることがわかる。オの学習者は、人によって学ぶ観点が異なることの魅力について言及している。また、この作品の教訓が現代にも通じることがを発見し、歴史文学の価値に気づき再発見できたことがうかがわれる。

「形と実力は同じように育てなければならない」と結論づけた9班は、その根拠として、現況の政治を採り上げて筆者の伝えたいメッセージが物語を越えた現実の世界とどのように関わっているのかということについて言及していた。(資料3-2)

資料3-2 9班の発表内容の一部

元総理大臣のK氏の息子が今、政府の一員として仕事をされているが、父親が偉大過ぎたために「形」から期待が大きくなってしまい、息子も優れているのに期待外れだと言われている。このように「形」だけが大きくなった人は、普通より優れていても、認められることが難しい現状がある。

現実の社会の事例を根拠とした9班の発表に対して、ある学習者は「『形』は昔の話で、私たちにとって遠い世界の話だと思っていたけれども、9班の発表を聞いて、現代にも同じようなことが起きているのだなということに驚きました」と書いている。

このように、「形」は、新兵衛だけでなく、日常の私たちにも大きく関わっているということを再発見することにより、学習者は「形」の持つ意義や働きについて改めて考えていくのである。

③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

グループの発表を聞いて考えさせられたこと、新たに発見したことを書くことは、登場人物の人柄や考え方、場面の展開、表現の仕方などの特徴を捉え、それらの意味や効果を考えることにつながっていく。他者との交流後に、自分なりに新たな考えを巡らせることは、比較、省察、複数の視点から作品の工夫や魅力を捉え直すクリティカル・リーディングの重要な要件の一つである。交流後に再度考えさせられたこと、新たに発見したことを書いた学習者の作品を次に示している。(資料4)

資料4 新たに発見したことを書いた生徒作品

この作品を通して一番強く感じたのは「人間は見た目で判断してはいけない」ということです。(中略)自分をもっと客観的に見ようと思いました。(中略)「私にはできない」という固定概念にとらわれて不安ばかりを感じず、前向きにどんどん挑戦していこうと思いました。他の班の発表を聞いて今の時代と結びつけたり作品の中で直接的に触れられていない作者の伝えたかった事を読みとったりして、より深く味わうことができよかったです。これからは、もっと広い視点から作品を見ていきたいと思いました。

学習者は、「人間は見た目で判断してはいけない」という作品の主題を自分に引きつけて考えており、自分を客観的に見ることや、固定概念にとられることなく、前向きに挑戦していくことの大切さに気付いている。他者との交流を通して、広い視点から作品をとらえていくことの重要性を読みとっていることがわかる。

(2) 「形」と複数の他の作品との「比べ読み」

「形」と分担した作品(「白」、「鼻」、「サーカスの馬」、「空中ブランコ乗りのキキ」)の比べ読みを通して、共通点、相違点に着目しながらそれぞれの小説の魅力について分析を行った。「サーカスの馬」(学校図書)、「空中ブランコ乗りのキキ」(三省堂)は、中学校の教科書教材であるため、学習者にとって抵抗感もなく読める教材である。「白」と「鼻」は、どちらも芥川龍之介の作品である。

① 作品の特質を明らかにする

班ごとに「白」、「鼻」、「サーカスの馬」、「空中ブランコ乗りのキキ」の分担を決めて、作品の登場人物、舞台、プロット(事件の発端、展開、クライマックス、結末)を確認して、簡単なあらすじを書かせることにより、作品の特質に気づかせていった。

② 読みの問題を設定し、問題解決を図る

それぞれの作品ごとに、読みの問題を設定させ、なぜなのかを考えさせる学習活動を行った。班ごとの作品別に出た問題を以下に挙げている。

「白」

・なぜ、「白」の体の色が白から黒に変わってし

まったのか。

- ・なぜ、白は新聞で報道されるような活躍ができたのか。

「鼻」

- ・なぜ、内供は、鼻を短くする方法を弟子に実践させたのか。
- ・自分のコンプレックス（劣等感）に悩む内供は、なぜ、せっかく短くなった鼻が元の長さに戻ってしまった時に、はればれした心もちになったのか。

「サーカスの馬」

- ・僕の思い違いは何だったのか。
- ・悠々と駆け回っている馬を見て、一生懸命手をたたいている僕の心情はどのようなものだったのか。

「空中ブランコ乗りのキキ」

- ・なぜ、キキは4回宙返りにこだわったのか。
- ・大きな白い鳥は、キキと同一人物だったのか。

③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

交流活動の後、「形」と好きな作品を選び、「比べ読み」を通して新たに気づいたこと、考させられたこと、発見したことを書く学習を行った。学習者の書いた作品を資料5に示している。

Nさんは、「形」と「サーカスの馬」の「比べ読み」の相違点として、主人公の設定に着目している。また、「サーカスの馬」の主人公の気持ちの変化や物事のとらえ方の変化をよく捉えており、「この後、少年はどう成長していくのかということを読み手に想像させる深い作品だ」と評価している。作品の特質をとらえるクリティカル・リーディングの読みが反映されていることがわかる。

Nさんは、二つの作品を通しての主題を「日々、自分を磨き、「自分の居場所」を自分で探すことが大切である」と分析している。作品の魅力として、全てを語らない余韻のある作品の終わり方にも着目している。「形」と「サーカスの馬」「鼻」の三作品を「比べ読み」をしたSさんの作品を資料6に示している。

原稿用紙の最後に、到達した学習目標のチェックができる欄を設けて学習の振り返りができるようにした¹⁵⁾。Sさんは、達成した学習目標の5項目の全てに○を入れている。（資料6）

「自己との再対話」により、クリティカル・リーディングの視点から自分の書いた作品を振り返り、言葉がもつ価値への認識を深めていく。学習目標のエ「比べてみると見えてくるものがあると

資料5 「形」と「サーカスの馬」の「比べ読み」

「形」と「サーカスの馬」。一見、まったく違う作品に見えるが、いくつかの共通点がある。それに対して違う部分もある。二つの作品を比べ、それぞれの魅力について述べていく。

まず、二作品の共通点について。「形」と「サーカスの馬」の私が考える大きな共通点は、強い思いこみを持っていたということである。「形」でいう雑兵のように、「サーカスの馬」の主人公である私もまた、馬に対して強い思いこみを持ち、主人から邪険に扱われていると勝手に決めつけてしまっていた。

見た目だけでその馬を知ったかのようになり、偏った考えにいたっていたのだ。「形」では、中村新兵衛の衣装を身にまとった二十歳にも及ばない少年に大人の兵が次々に倒されてしまう。相手がどんな人物かを知っていたのならば、結果は変化していただろう。（中略）

次は相違点について。根本的に違っている部分は、主人公の設定である。「形」の主人公の中村新兵衛は誰もが知るほどの優れた武者。一方、「サーカスの馬」の主人公である少年はどちらかといえば、周りより少し劣った人物である。これに対する結末もまた面白い。「形」では、新兵衛が倒されるというバッドエンドであるが、「サーカスの馬」では、主人公が前向きに生きようとするハッピーエンドである。（中略）最後に作品の魅力について。まず、読んだときに衝撃を受けたのが、主人公の性格や、周囲の人間、あらゆる関係についてだ。「サーカスの馬」の主人公の気持ちの変化や物事のとらえ方の変化がよく表されており、この後、少年はどう成長していくのかということを読み手に想像させる深い作品だと感じた。二作品を通して私が考えたことは、「自分なりに輝ける場を待っているだけではない」ということだ。日々、自分を磨き、「自分の居場所」を自分で探すことが大切なのだと思う。これは私なりの解釈である。二作品にはこのようなことは書かれていない。直接、伝えたいことを言わないのも作品の魅力ではないかと考える。

Nさん

資料6 「形」と「サーカスの馬」、「鼻」の三作品の「比べ読み」

- ㉞ (振り返り) 学習後、達成できた学習目標に○をつけよう
- ㉟ 比べてみると見えてくるものがあるという実感を持つことができた。
- ㊱ 比べてみるという発想を持つことができた。
- ㊲ 物事を考えるときには「観点」があることに気づいた。
- ㊳ 対比して考えることは楽しいという実感を抱いた。
- ㊴ 対比や分析するときには使う言葉を身につける。
- ㊵ 他のグループの発表を聞き、自分の考えと比較することができた。

資料7 Sさんの書いた三作品の魅力

三作品の魅力は、全ての作品がラストの終わり方が比較的あっさりとしていることである。なぜ、この終わり方が魅力かというしっかりとした内容で伝わりやすいように細かく書いてしまうと考え方が読んだ人全てが同じになり、読書の楽しさを知ることが難しいからだ。

しかし、それを三作品のようにあっさりと終わらせることで、読んだ人の考え方は変わっていくし、繰り返し読むと一人で何種類もの考え方が生まれる。だから、読書の楽しさを自分なりに見つけることができるのだ。

「このように実感を持つことができた。」とカ「他のグループの発表を聞き、自分の考えと比較することができた。」の項目は、ほとんどの学習者が○を付けていた。学習目標の観点表により、自己の学びを学習者が振り返ることが可能になる。

クリティカル・リーディングの読みの力を振り返りができるように、観点表は学習形態に応じて工夫していくことが重要である。

Sさんは、作品の終わり方に着目して、ラストを簡潔に書くことにより、読み手が様々なとらえ

方、考え方が可能になり、自分なりの読書の楽しさを知ることができるという読書への広がりについて言及している。(資料7)

「形」と「空中ブランコ乗りのキキ」の「比べ読み」をしたある学習者は、作品の共通点として主人公が「他者からの評価に大きく左右されてしまったこと、影響されたこと」を相違点として「主人公が死を覚悟していたか否か」を挙げている。さらに、両者の作品の魅力として、結末を曖昧にすることにより、読み手に想像させやすいことを挙げていた。「空中ブランコ乗りのキキ」では、倒置法を用いて、緊張感を高めているところも工夫の一つであると分析しており、表現技法の効果についても考えを巡らせていた。

3 学習者の振り返りの考察

「形」と他の作品の「比べ読み」後の振り返りを学習者は次のように記している。(資料8)

資料8 「形」を終えての学習者の振り返り

- ① 私は、「比べ読み」で発見したことがある。それは、共通点と相違点を見つけることにより、より二つの作品が深まるということだ。それまでの見方や考え方も変わった。似ている作品はたくさんあると思うけれども、だからこそ、比べて読むことが大切だと学んだ。今まで比べるということはしたことがなかったけれども「比べ読み」をしてその作品の色々な角度から見られるようになった。
- ② 一見関係のないと思っていた作品でも、読み進めていくと意外な共通点や相違点が発見できることが「比べ読み」のいいところであり、魅力であると思います。別の作品で読み比べをしてみても楽しいと思いました。
- ③ 両作品はとてもおもしろく、想像力を働かせてくれる。二つの作品を読み比べることで一つの作品だけを読むよりも、考えや発見が増えるだろうし、読解力も向上するのではないかと思います。

①の記述から、これまで「比べ読み」をした経験のなかった学習者が、共通点と相違点に着目することにより、作品の理解がより深まっていくことや多角的に作品を捉えることができるようになったことがわかる。クリティカル・リーディングによる多様な読みの力の有効性が示されていると言えよう。②の記述からは、他の本に関連付けてさらに読んでいきたいという積極的な読書への意欲がうかがわれる。③の記述からは、想像力を働かせる「比べ読み」の面白さが伝わってくる。二冊の本の「比べ読み」をすることにより、新たな考えや発見が増え、読解力が向上していくことを示唆している。

V まとめと課題

本稿では、クリティカル・リーディングを深めるための文学作品における「比べ読み」の学習指導のあり方について考察を行った。「比べ読み」の先行研究からさらに検討を加え、クリティカル・リーディングを深めるための「比べ読み」の学習指導の要件として以下の三つを構想した。

- ① 作品の特質を明らかにする
- ② 読みの問題を設定し、問題解決を図る

- ③ 他者との交流を通して、新たに発見したことを表現する

これらをふまえることにより、主体的に問題を発見し、他者との交流を経て、多くの発見や新たな視点の転換が生まれていく深い学びにつながっていったと考える。

学習者の記述から、対話的な読みの交流を通して、多角的に作品を捉えるクリティカル・リーディングの力が育成されたことがうかがえた。資料6、7の学習者の作品からは、三作品の結末の終わり方に注目してその意味を考えるという創造的思考への萌芽が見られた。

「比べ読み」とクリティカル・シンキングとの関わりや評価のあり方についても明らかにしていく必要があるが、それらは今後の課題である。「比べ読み」の学習を導入する際には、単発に行うのではなく、易から難へのスモールステップをふまえながら、系統立てて単元構想を行い、他学年と情報を共有しながら、連携を深めていくことが重要である。やがて、学習者自身が類似したテーマの作品を見つけ出すことができるように、系統立てた段階を設定していくことは今後の課題である。「比べ読み」から同じテーマの作品へと多読につないでいくことは、学習者の豊かな読書活動を導くことにつながっていくと想定される。文学的文章だけではなく、説明的文章と連動させていくことも必要であろう。

「比べ読み」のテキスト開発とそれに伴う単元開発や、系統的な年間指導計画に基づいたクリティカル・リーディングの新たな視点や着想、発見を創出するための手立てを今後も考察していきたい。

付記

本稿は、第140回全国大学国語教育学会における紙面発表の原稿を加筆修正したものである。

【註】

- 1) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説国語編」、pp.127-128.
- 2) 森田信義(2010)『「評価読み」による説明的文章の教育』溪水社、有元秀文(2008)『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革-「読解表現力」と「クリティカル・リー

- ディング」を育てる方法-』明治図書
- 3) T・E・ラファエル、L・Sバルド、K・ハイフィールド (2012) 『言語力を育てるブッククラブ』有元秀文訳ミネルヴァ書房、pp.vi-vii. 引用箇所は、有元がクリティカル・リーディングについて本書にて解説している箇所である。
 - 4) ピーター・H・ジョンストン〈長田友紀・迎勝彦・吉田新一郎編訳〉(2018) 『言葉を選ぶ、授業が変わる!』ミネルヴァ書房 p98、p111を参照にしている。
 - 5) 『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要第53巻』(2013) には、クリティカル・シンキングを育成する社会科、数学科、体育科の教育実践が報告されている。その他として、数学科における井上優輝・服部裕一郎・松原和樹・袴田綾斗 (2018) 「組み合わせ論における諸問題を教材としたクリティカルシンキングを育成する数学授業の開発」全国数学教育学会誌、数学教育学第1号、pp.99-120、英語科における天久大輔 (2018) 「アクティブラーニングによる英語指導から導く問題解決能力の育成クリティカルシンキングの手法による英語学習を通して」教職実践研究8号 pp.1-16 沖縄大学教職支援センターの論文がみられる。
 - 6) 中洌正堯 (2020) 「物語「比べ読み・重ね読み」のすすめ」日本国語教育学会月刊国語教育研究9月号、p1
 - 7) 大村はま (1984) 『大村はま国語教室第7巻読書生活指導の実践(一)』筑摩書房、pp.80-86.
 - 8) 安藤修平編、飛田多喜雄監修 (1989) 『国語によって思考力・心情を養う指導』新学習指導要領中学校国語科のキーワード明治図書、pp.3-4.
 - 9) 中洌正堯 (2006) 「文学作品をイメージ豊かに読む」『いま求められる〈読解力〉とは〈教育フォーラム第38号〉』人間教育研究協議会編金子書房、pp.107-108
 - 10) 酒井雅子 (2017) 『クリティカル・シンキング教育—探究型の思考力と態度を育む』早稲田大学出版部、pp.165-166
 - 11) 前掲書9 p109「文学を読むこと」の学習指導内容を教材内容・教科内容・教育内容の三層にわたって見定めておくことよと論じ、第一は“「作品」を読む”段階(テキストを読む段階)であり、第二は“「文学」を読む”段階(教科内容を読む段階)であり、第三は“「人生」を読む”段階(人物の生き方を読む段階)の読みと論じている。
 - 12) 船津啓治 (2010) 『比べ読みの可能性とその方法』溪水社、p5を参照にしている。
 - 13) 前掲書10 pp.250-254
 - 14) 石井英真 (2017) 『中教審「答申」を読み解く』日本標準、p77
 - 15) 学習目標の観点表については、堀江祐爾 (2007) 『国語科授業再生のための5つのポイント—よりよい授業づくりをめざして—』明治図書を参考にさせていただいた。

【参考文献】

- 吉川芳則 (2017) 国語教育選書『論理的思考力を育てる! 批判的読み(クリティカル・リーディング)の授業づくり—説明的文章の指導が変わる理論と方法—』明治図書
- 楠見孝・子安増生・道田泰司 (2011) 『批判的思考力を育む—学士力と社規人基盤力の基盤形成』有斐閣
- 楠見孝・道田泰司 (2015) 『批判的思考—21世紀を生きぬくりテラシーの基盤』新曜社
- 坂本句、山脇岳志編 (2022) 『メディアリテラシー吟味思考(クリティカルシンキング)を育む』時事通信社
- 澤口哲弥 (2013) 「高等学校における評論文のクリティカル・リーディング—思考の過程を可視化する学習指導—」『国語科教育』第74集、pp.54-61.
- 三根直美 (2015) 「文学作品における読みの探究—「形」(菊池寛)の場合—」広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要第62号、pp.110-111.